

時の動き

「かんぽ」の不正で何が問題なのか

元企画編集委員 南部 光春

新自由主義の破綻ではないのか
郵政民営化から約12年が経過しました。これを民営化するにあたって、当時の首相であった小泉純一郎は次のように言い放って総選挙に臨みました。

「民営化すればサービスが良くなる」と。しかし、結果はどうでしょうか。どんどんサービスを低下させようとしています。郵便物の土曜配達をやめるといっています。これら新自由主義政策として推し進める時、今日の腐敗にまみれた不正行為やサービスの低下は当然予測されたことです。「儲けが第一」とする郵政公社は、保険業務はもとより郵便物の低い収益性を考えれ

ば、不正問題もサービス低下も当然だとすることはわかりきったことだったのです。すべてが競争の中に投げ込まれるわけですから、競争が生み出す矛盾は必ず現われると考えられてきました。

私は病魔のため実践から長らく遠ざかっていますが、新自由主義は必ず破綻すると考えてきました。ボロボロ・ボロボロ出てきたではないですか。貧富の格差は縮まるどころか拡大の一途です。アメリカの若者たちが言う、99..1、という現実の状況は今や日本も同じ状況だと考えます。企業の内留保は、軽減税率そして輸出戻し税

などで肥え太るだけですが、一方の労働者は、春闘すら闘えなくなつて賃上げはかばかしくありません。「資本の自由な活動」のため、公営企業・国営企業は邪魔でした。現実には郵政が抱えていた国民の財産は、巨大資本、多国籍資本に食い荒らされています。なかでも「保険業務」にその顕著な収奪が仕込まれていました。日本生命・住友生命・多国籍資本アフラックなどの参入です。

郵政ユニオンのニュースで知るのですが、いち早くその破綻を見通すこともできました。「成果主義」の導入です。「民営化に相応しく、頑張ったも



権利の全通と言われていたころの
全通第16回中央委員会の様子

のが報われる制度」として導入された、
渉外社員に限った制度ですが、「基本給
の切り下げ」です。まさに激烈な競争
を強い、労働者の排除を目指す新自由
主義政策です。それに付け加えると
「自爆営業」もそのたぐいの資本の攻
撃だったのです。

郵政職場に労働組合は

あるのでしょいか？

かつての全通（J P 労組の前身）は、

「権利の全通」と言われ、日本の労働
運動でも大きな力を発揮してきました。
しかし、1970年、宝樹が全通の委
員長の時に変質させました。それは全
通のみでなく、宝樹の提起は、民間産
業の大労組を巻き込んで、左派を切り
捨て、「右翼的戦線の再構築」を打ち出
したからです。

問題を新自由主義破綻に焦点を絞つ
て述べてきましたが、私の44年間の
職場での取り組みや闘いを通して得た
教訓は、常に資本との力関係が敢然と
現われるのは、労働現場・職場である
とすることです。資本は勿論、労働組
合の幹部を攻撃対象としつつも、資本
の考えを踏襲する幹部の存在を許す職
場づくりに懸命だからです。

全通宝樹は勿論ですが、民間大労組
幹部の思うがままの結果を許してしま
うのは、職場管理者による労働現場の
支配が幹部抱え込みと同時に進行する
と、言うことです。日常不断の「反合理

化で武装された」労働組合の民主主義
が失われると、簡単に言うくと、資本の
勝手は許さない、「小さな何でも話し合
える」職場民主主義がなくなると、資
本と労働者の関係は、資本に従属する
労働組合へ幹部も含めてまっしぐらに
なります。

成果主義と競争の支配する職場では、
矛盾が深く沈み込んで見えますが、そ
れだけ不満は一人ひとりに蓄積されて
います。私は現在闘病中ですが、自分
の在籍した職場の仲間との共闘を第一
として、職場民主主義を守る砦の一人
を心がけ、労働運動の後退を許してし
まった自分の総括を生かしたいと考え
ています。

郵政で奮闘する仲間にはあらためて
エールを送り、資本の攻撃を撃退して
ください。

（なんぶ みつはる）